

氏名 中 原 ゆかり

学位（専攻分野） 博士（文学）

学 位 記 番 号 総研大甲第163号

学位授与の日付 平成8年3月21日

学位授与の要件 文化科学研究科 比較文化学専攻  
学位規則第4条第1項該当

学 位 論 文 題 目 歌に表象される村落意識  
－奄美における「シマの歌」の研究－

論文審査委員 主 査 教 授 熊 倉 功 夫  
教 授 藤 井 知 昭  
教 授 大 森 康 宏  
教 授 須 藤 健 一（神戸大学）  
研究員 小 島 美 子

（東京都江戸東京博物館）

## 論文内容の要旨

本研究の目的は、奄美における「シマの歌」を研究することにより、現地の人々のもつ「シマ」（村落）のイメージを明確にすることである。研究方法としてはエスノグラフィの方法をとり、本稿全体は奄美大島佐仁集落の八月踊り歌をめぐる語りと行動の記録である。

第1章「序論」では、本研究の目的、方法、意義、および本稿で問題とするシマの歌について概説する。シマの歌の概念とは、伝承歌謡が自分たちのシマのものであり、自分たちのシマの歌こそが奄美の中心に位置する最も素晴らしいものであるというシマの人々の意識である。シマの歌は音響として特定することも、そのままの形で姿をあらわすこともなく、実現されるパフォーマンスの中にのみその姿をあらわす。奄美の人々がシマの歌の概念をもつことによって、実現される歌は常に洗練され、シマ社会は維持されている。シマの歌の研究は、歌の洗練とシマ社会を研究するために重要であり、従来の研究が問題としてきた組織や音響といった表層的なシマではなく、シマの人々のもつイメージとしてのシマを考察するために重要である。

第2章「シマの歌の成立」では、シマの歌の概念の成立について、シマの歴史、およびシマ人たちの語りをもとに考察する。シマの歌の概念は、おそくとも薩摩藩服属時代末には成立して現在に至るものである。そしてシマの歌の概念をもつシマの人々は、シマの歌はシマの始源から現在まで続くものと認識しており、歌を歌う現在という時は常にシマの始源と重ねあわされている。

第3章「シマの歌社会」では、シマ社会および歌の集団について述べ、シマの歌社会の特徴を考察する。歌の集団としては、八月踊りの時に機能するマエとウシロの集団、および日常的に活動する自発的な歌クミアイの集団がある。そしていずれの集団にも、個人の参加の自主性、流動性、平等性といった特徴がみられる。シマの自由で平等な歌社会では、個々人は歌に対する自由な感性を語ることができ、現前する歌のパフォーマンスに対する新鮮な「自分の耳」と「開かれた感受性」が育っている。

第4章「シマの生活と歌」では、シマの年中行事、通過儀礼、日常生活において歌が歌われる機会と状況について述べる。歌はシマの生活の様々なコンテクストの中で歌われている。シマの歌の概念は一朝一夕にして身につくものではなく、シマに生まれ、豊かな歌の生活を何年も体験することによってのみ習得される。そしてシマでは、シマの歌に対する感受性を身につけてはじめて、真のシマ人と認められる。

第5章「八月踊りのパフォーマンス」では、八月踊りの奏演と旧暦8月のシマ全体の祭りの中でのパフォーマンスの状況を述べる。八月踊りの輪の中には能力に基づいた秩序があり、技術的に難しいものでありながらも、子供からベテランまで一堂に同じ輪の中で楽しむことができる。1回ごとのパフォーマンスの顔ぶれはシマ人全員の一部分だが、個人はパフォーマンスを媒介に、シマの八月踊りという全体に参加していることを意識している。即興性の強い八月踊りの1回ごとのパフォーマンスの異同は大きい。そしてその即興性を作り出すシマの八月踊りの様式を記憶しているのは、他ならぬシマ人たちの身体である。シマ人たちは年に1度のシマの八月踊りに相当の魅力を感じ、歌い踊ることに情熱を注いでいる。

第6章「八月踊りをめぐる語り」では、シマ人たちによるパフォーマンスの評価、および八月踊りの記憶とともに語られる個人の人生経験について述べる。シマの八月踊りは演者と鑑賞者にわかれることなく、誰もが歌い踊る楽しさを共有することを基準として、常に洗練されている。1人1人の人生経験や親しい人の顔ぶれも、皆それぞれに異なっている。だが、個人が気づくことのなかった自分を発見することも、自分の感情を表現することも、すべては集団で歌い踊る八月踊りのパフォーマンスに参加することによってのみ可能になる。そして、個人は八月踊りを「シマのもの」であると同時に「自分のもの」と意識して、積極的にパフォーマンスに参加している。個人のもつ八月踊りの芸に対する評価は、歌や踊りの技術、生き方（あるいは人格）そして人間関係といった要素が複雑にからみあってなされている。個人の人生には限りがあっても、芸は永遠に終わることはない。それによってシマの人々は、シマの八月踊りが永遠に続くものであると考えている。シマ人にとってシマの八月踊りとは、歳月をかけて身につけてきた技術であり、個々人の人生そのものであり、シマに暮らす周囲の人々との生き生きとした関係なのである。

第7章「八月踊りの競い合い」では、佐仁のシマの内部にあるマエとウシロの2つの地区でパフォーマンスを競い合う状況を述べる。マエとウシロは佐仁の八月踊りという同じ様式の範囲内にあるが、同質なためにかえって細かな差異にも敏感である。マエでは誰もが参加しやすいという観点から佐仁の八月踊りの中心はマエであると主張し、ウシロでは伝統を守るという観点から佐仁の八月踊りの中心はウシロであると主張している。同じシマの内部に互いに異なる「内なる外部」を作りだし、競い合うことによって、シマは強く意識され、シマの八月踊りは洗練されている。

第8章「八月踊りとシマの外部」では、八月踊りがシマの外部で上演される状況について、シマを訪れるテレビ局の撮影、および本土での舞台出演について述べる。シマ人たちは、シマの外部の観衆の目を意識して歌い方や踊り方に工夫をこらし、シマの祭りでのパフォーマンスとは異なる方向へ歌と踊りを洗練している。しかし、佐仁では2つの洗練の方向は対立することはない。シマ人たちは、状況に応じて2つのパフォーマンスを楽しんでいる。また、舞台への出演者は数十名でも、シマの全員が真剣に取り組むことは、シマの祭りと同様である。そして舞台でも全員が歌と踊りを心から楽しむことを目指し、シマの八月踊りが歌い踊る「今」「現在」の状態の中に体現されることには変わりがない。さらに過疎化によってシマが衰退する現在、八月踊りこそがシマの継続と繁栄を象徴するものと考えられるようになってきている。

「結論」では、本稿全体をもとに、歌を通じてシマの人々のイメージするシマについて考察する。シマとは、個人と個人、個人とシマ、シマとシマ、シマと国家といった様々なレベルの内と外との交換によって醸成され、再生産し続ける豊かなるイメージである。そして豊かなるシマのイメージは、奄美では他ならぬ伝承歌謡によってつくられているのである。

## 論文の審査結果の要旨

本論文は、奄美大島佐仁地区の「八月踊り歌」の、長期にわたる精力的な実地調査を基礎としたエスノグラフィーである。住民の内部に入り込み、聞き取りを軸として「シマ」（地域）と「シマの歌」をめぐる住民のイメージを明らかにしようとした論文である。「シマの歌」とは、歌を通じて「シマ」を意識する概念にとらえ、ことに「八月踊り歌」に最も鮮明にあらわれる住民のアイデンティティーとしてのシマのイメージをさまざまな方向から明らかにし、そのあり方と変容を論究している。

論文の構成は、第1章「序論」において方法、目的、意義について述べ、先行研究の整理のうえに村落研究と民族音楽研究のはざままで欠落している問題の所在を指摘している。

第2章「シマの歌の成立」では、シマの歌の史的背景とその起源がどのように意識されているかを述べている。第3章「シマの歌社会」ではシマ社会の構成とその内部での集団と個人の関係について論じている。ことに個人の自由な行動に注目している。第4章「シマの生活と歌」ではシマの年中行事、通過儀礼、日常生活のリズムのなかで、歌と踊りがいかに編成されているかを述べ、それに参加する人の一生のなかで歌のもつ意味が触れられている。ことに人々がシマというものを歌を通じて発見していく過程に注目している。

第5章「八月踊りのパフォーマンス」、第6章「八月踊りをめぐる語り」の2章は本論文の中核をなすところである。第5章では八月踊りの具体的な奏演と状況を詳細に記述し、島外に住む住民が八月に帰村する意識にも言及する。また八月踊りのパフォーマンスは1回ごとに異なり、そのことに人々が魅力を感じている点が強調される。つまり映像学ないし音楽学的方法では記述できず、エスノグラフィー的手法によって記述可能な問題の所在が暗に語られている。

第6章では歌と踊りをめぐる人々の言説を詳細に引用しつつ、芸の洗練、評価、そこにあらわれる人間関係、人間性について感動的なモノグラフが記述される。

第7章「八月踊りの競い合い」では地域による差異化によって芸が洗練される過程が、第8章「八月踊りと島の外部」では島外への出演、テレビ出演等を契機とした住民の意識の変化が述べられ、最後に結論が置かれている。

このような本論の構成からもうかがわれるように、村落研究と民族音楽研究の両面を統合し、八月踊りの調査と分析を通じてシマのイメージを明らかにすることを目的としているが、そのイメージがやや抽象的であり、村落研究の成果が十分消化されておらず、また音楽人類学あるいは民族学的研究としても、意図的に捨象した部分はあるにせよ不十分で、理論的方法において不安定な点がある。またこうした特定の歌と踊りに対して住民がアイデンティティーを求める地域（村落）が日本国内、あるいは近隣のアジア諸国にあるのか否か、すなわち、本論文の課題の特殊性と普遍性について一層深い考察が期待される。筆者自身の思いが高まって、あまりにも冗舌にして美しい言葉で語りすぎているところがないか、いささか疑問が残る。

しかし、従来の学問分野をこえた問題意識の上に、人々と歌と踊りとの関わりを動的にとらえた点では先駆的な研究であり、筆者の特長をいかしたねばり強い調査によって得られた聞き取り資料の蓄積は貴重なものがある。その意味で本論文は学位を授与するにふさわしい論文と認定する。

今後、本論文の成果が理論的に深められ、他の地域との比較研究へと広がることで、さらに豊かな研究に成長することを期待したい。